

Title	サン＝テグジュペリにおける物語形式の探求：5作品の「語り」分析を通じて
Author(s)	藤田, 義孝
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58080">https://hdl.handle.net/11094/58080</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【31】

氏名	藤田義孝
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第24269号
学位授与年月日	平成23年1月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	サン＝テグジュペリにおける物語形式の探求—5作品の「語り」分析を通じて—
論文審査委員	(主査) 教授 和田 章男 (副査) 教授 森岡 裕一 言語文化研究科教授 金崎 春幸 准教授 山上 浩嗣

## 論文内容の要旨

本論文は、サン＝テグジュペリの完成作全5作—『南方郵便機』(1929)、『夜間飛行』(1931)、『人間の大地』(1939)、『戦う操縦士』(1942)、『星の王子さま』(1943)—を対象として、語りの視点、情報量の制限あるいは過剰、登場人物への焦点化などのナラトロジーの分析方法を用いて、語り手の機能および物語形式の意味を明らかにすることを目的としている。序論、5つの章、結論から構成され、A4判195頁、四百字詰原稿用紙に換算して約630枚から成

る。

第一章では、処女作『南方郵便機』を対象として、作中人物ベルニスの失恋と脱出という伝統的な三人称物語に、語り手「私」の回想という主観的な時間軸が導入されることによって、直線的で客観的な時間関係が攪乱され、「情報過剰」や「転説法」というような問題を生じさせながらも、運命の前に消え去る人間存在のはかなさが、同様に無力ではかない人間の視点から提示されるという独自の表現形式となっていることを明らかにしている。

第二章で考察される『夜間飛行』では、共同事業つまり夜間飛行が主題となり、孤独な主人公の行動を称えるべく「三人称・人物視点」という物語形式が採用されている。物語最終部において、生命の本質である生成変化は言葉で捉えられない、というベルクソン主義の宣言とともに、出来事を語りと同時に置く現在時制の語りによって、「全知」と思えた語り手は出来事の結末を知らない一人称的語り手となると論じる。

『夜間飛行』以降、伝統的な三人称物語は放棄され、第三章で扱われる『人間の大地』では、「一人称・語り手視点」が採用される。人々を親密な語りのもとに結び合わせる役割を担う語り手「私」が物語の中心的存在となり、語り手の権威が物語の隅々まで及ぶこととなっている。しかしながら、人間の真理を明らかにするのは書物ではなく、大地であると説く冒頭の箴言に反して、「行動」を通じて見い出されるべき真理が、語り手の「言葉」によって伝達される点において、内容と形式が矛盾していることを指摘する。

第四章で論じられる『戦う操縦士』においては、「一人称・人物視点」が採用され、行動の最中にある「私」の視点が支配的となる。本作は、語り手＝登場人物「私」が行動の意味と「我々の絆」を見い出すと同時に、言葉や論証がその効力を失う物語であると捉える。「語り」を否定する語りによって「行動」を称揚する『戦う操縦士』は、物語の主題と形式の両面において「行動の文学」にふさわしい作品であるとみなす。

第五章では『星の王子さま』を採り上げ、理性的かつ懐疑的な「大人たち」に「おとぎ話」を信じさせるために、巧みな情報制御を伴う語りと挿絵による三重の枠構造を分析する。最終部において、王子と絵の中のヒツジを同列の存在として扱う転説法によって、読者は「見えない」存在を信ずる「虚構契約」をむすぶことになると論じる。このようにして『星の王子さま』は読者の参入を要求する斬新な形式のテキストであることを論証している。

結論として、サン＝テグジュペリは第二次世界大戦後に現れるヌーヴォー・ロマンへと引き継がれていく物語形式の探求者であったとして、同作家の文学史上の位置づけを修正するとともに、特に『星の王子さま』という童話をサン＝テグジュペリの物語形式の到達点ととらえることによって、同作の隠された意図を明らかにした。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、サン＝テグジュペリの作品をナラトロジーの方法によって分析した点において意義がある。従来、同作家の小説は行動、友愛、連帯という主題・内容の観点から研究されることが多く、とりわけ伝記的アプローチにより、作家と作品の関係を論じるというスタイルが一般的であった。それに対して本論文は、もっぱら作品のみを対象にして、ナラトロジーの分析方法を用いて考察した最初の野心的な論考として評価できる。完成作全5作品を年

代順に論じながら、その方法は首尾一貫している。また、作品によって方法の力点を換え、さらには象徴、イメージ、アレゴリーなどの分析も補助的に活用するという柔軟性も本論文の幅広さに貢献している。しかも、分析に終始することなく、適切に分析から解釈へと及び、語りの形式が作品の主題・内容を効果的に表現していることを明らかにしている。

各章が一つの作品の考察に充てられているが、各章の繋がり、言い換えれば各作品の関連を十分に意識した論が展開されており、論文題目に見られる「物語形式の探求」というテーマに沿って、作家が伝統的な三人称体小説から脱却して、一人称体を中心とする新しい物語形式を探求していくその軌跡あるいは進展が論証されている。とりわけ、例外的な作品とみなされてきた『星の王子さま』についても、挿絵も含めて語り形式の分析が施され、読者にも作品参与を促すという巧みな構造によって、サン＝テグジュペリによる物語形式探求の到達点として位置づけたことは意味深い。

20世紀を通して試みられてきた新たな表現形式の模索の一翼をサン＝テグジュペリも担っていたとする文学史上の位置づけの修正は十分説得的である。ただ、複数の作品をもとに物語形式の探求をテーマにする限り、作家の意図を問題にせざるをえない。その場合には小説作品以外の文献資料も検討する必要があるかと思われる。しかしながら、首尾一貫した方法論に基づきつつ、サン＝テグジュペリの全作品を分析し、そこに見られる物語形式の進展を明らかにした意義は十分に高い。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。